

眼科

眼科部長 木内貴博

◆ 診療体制と患者構成

診療科スタッフ

木内 貴博：眼科部長

田原由希子：眼科医師

大鹿 京子：眼科医師（非常勤）

指導医・専門医・認定医等

木内 貴博：日本眼科学会専門医、日本眼科学会指導医、博士（医学）

大鹿 京子：日本眼科学会専門医

外来診療実績

月曜から土曜の午前中は一般外来、平日の午後は視野検査・蛍光眼底造影等の特殊検査、レーザー手術、他科からのコンサルテーション等の診療を行った。2021年度の外来受診者数は延べ10,705人であった。昨年度と比較して改善傾向がみられたものの、COVID-19の感染拡大前よりは未だ少ない水準といえる。人間ドックに関しては、眼底写真の読影を行い、健診業務に貢献した。

入院診療実績

主として手術施行患者に対し入院治療を行った。その他、入院のうえ保存的療法が適応となるケースに対しても入院加療を行った例があった。また、他科入院患者に対する眼科診療依頼も多く、中には重篤な感染性眼内炎も含まれており、高度な管理を要する症例があった。

◆ 診療科紹介（概要）

当院眼科では、日常よく見かける目やに等の症状に代表される結膜炎やいわゆる「ものもらい」等の外眼疾患をはじめ、白内障、緑内障、網膜硝子体疾患等、眼底疾患まで多岐にわたる疾患に幅広く対応し治療を行っている。また、難治疾患等で高度な医療が必要な場合、筑波大学附属病院と共同で検査・治療を行う等、大学病院との強い連携機能を有することも特徴である。

手術は白内障手術が中心で、通常は水晶体超音波乳化吸引術で行っている。小さい切開創からの手術であり日帰りにも対応できる方法だが、手術後の安全性を第一に考え基本的に短期入院で行っている。

また、日常診療の中からデータをまとめて解析したり、貴重な症例の情報を発信したりすることは医師としての重要な使命のひとつの信条から、可能な限り学術活動を行うよう心掛けている。できれば全国学会に毎年1回の演題発表と、その内容を論文にまとめる作業

を目標に掲げ、これらを達成できるよう鋭意奮闘している。

◆ 診療する主な疾患

- 外眼疾患
 - 白内障
 - 緑内障
 - ぶどう膜炎
 - 網膜硝子体病（糖尿病網膜症、加齢黄斑変性、網膜静脈閉塞症、網膜裂孔等）
 - 視神経疾患
 - 斜視、弱視
 - 外傷
- など

◆ 医療の質の自己評価

常勤医師の1名が緑内障専門医ということもあり、緑内障の診断及び治療に関しては水準以上にあると思われる。特に、光干渉断層計（OCT）の網膜神経節細胞解析プログラムを用いた検査では、視野異常が検出される前の段階の構造的異常を把握できるため、これまで「緑内障予備群」とされてきた症例に対しても、病期（staging）の情報を的確に提供できている。

また、白内障手術における術中及び術後合併症も低頻度であることから、この分野においても比較的良質な医療を提供できているものと考えられる。

その他の疾患に関しては標準的な医療水準を維持していると思われるが、網膜硝子体疾患に関しては、手術装置が常設されていない等の理由から筑波大学附属病院へ治療を依頼している。

◆ 手術・検査実績報告

手術実績

今年度、中央手術室で行った手術の内訳は白内障手術、各外眼手術等であった。外来手術では、網膜光凝固術、YAGレーザー後嚢切開術、レーザー虹彩切開術、選択的レーザー線維柱帯形成術、鼻涙管開放術、外眼の小手術等を多数例施行した。

検査実績

- 網膜光干渉断層計（OCT）による眼底三次元画像解析検査
- 黄斑部解析、網膜神経節細胞解析、視神経乳頭解析、乳頭周囲網膜神経線維層解析
- 視野検査（動のおよび静的視野検査）
- Hess赤緑試験
- 斜視検査、両眼視機能検査

- 蛍光眼底造影検査
- 角膜内皮細胞数検査
- 電気生理学的検査（ERG、VEP）
- 超音波Aモード、Bモード検査 等

◆ その他

当科では緑内障の診断・治療を診療の重要な柱のひとつに掲げ、高度な医療を提供できるよう精力的に取り組んでいる。診断までのプロセスは詳細かつ綿密に系統立てられ、可能な限り標準化を図るよう心掛けている。また、点眼治療導入の際には片眼トライアルを必ず行い、薬物療法の効果を十分評価したうえで治療を開始するようにしている。眼圧下降が不十分である症例には、選択的レーザー線維柱帯形成術を行ったり、外科治療を検討したりしている。外科治療に関しては筑波大学附属病院と連携しながら行うこともある。